

「神の目に映る姿」

詩篇 第112篇 4節～9節
マタイによる福音書 第6章 1節～4節

説教 岡村 恒牧師

「隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。」(4節)主イエス・キリストが、この朝、私たちにお語り下さっている言葉です。

この説教を最初に聞いたユダヤ人は、『十戒』に代表される律法によって与えられた神との特別な関係について、思い違いをしていました。いったい自分が何をしたら神に喜ばれるか、と考えるようになっていました。しかし聖書は、神が何をしてお下さったかを示しています。

当時、ユダヤ人は神を礼拝に行く時に、三つの良い行いを大切にしていました。良い業と呼ばれる《施し》、神への《祈り》、神に集中するための《断食》の三つです。しかし、主イエスがエルサレムの神殿で目にした礼拝者の姿は、この三つを誤解した人々でした。

「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。」(1節)と口を開かれた主イエスは、「報いを受ける」という言葉を繰り返し用いながら、私たちの目を、神の豊かな報いに向けさせて下さいます。私たちは神と取引するかのようになり、ご利益とか報いということを考えてしまいます。確かに聖書は、「あなたの父は、報いてくださる」(4節)と宣言します。しかし聖書が描く神の報いは、私たちが想像するようなものとは全く異なります。この世界では、ある犠牲を払った者に対して、それなりの、あるいは払った犠牲以上の利益があるとき、報われたと考えます。ところが全知全能の神が私たちにお与え下さるのは、いつでも一方的な恵みなのです。私たちの側から、神に差し出すことができるようなものは何一つないのです。

聖書は、たとえ全財産を人に施しても、誰かの身代わりとなって火に焼かれても、もし神の愛と無関係に、誤った方向を向いてなされるようならどんなに素晴らしい愛の業も「無に等しい」、「無益である」と断言します。(コリント人への第一の手紙 13章1節～3節)

主イエスは、父なる神がどういうお方か、父から受ける報いがどんなものかをよくご存知でした。だからこそ主はこの日、人に施す時、その手にしているものは本来誰のものかと問いかけるのです。多くの人が、まるで全てが自分のもので、それを手離して人に施すと、引き替えに神から報いを得ることができると思いをしていたからです。

わざわざ他の人に見せるために施しをする者は『偽善者』だと言われています。偽善者はギリシャ語では、仮面芝居の俳優、役者を意味する言葉です。外見では人を助ける施しをしているように見えても、実は人に見せるためにしているなら、仮面をかぶった役者と同じだと言うのです。

この偽善から解放されて、神の祝福を受けて生きるための出発点ははっきりしています。この手の中にあるもの、命も財産も、あらゆるものが全て神のものだと知ることです。神のものを神のものとして認め、神の御用のために用いて下さるようにとお返しして生きる道が、私たちには与えられているのです。

心から湧き上がる愛の思いに従って、人の目や自分自身の目からも自由になって、神のものを分け合って生きることができます。神のものを神の為に使って頂くことが、最も良いことなのです。これは、全てが神のものだと知っている者に、神が与えて下さる特別な知恵です。

6章の終わりには、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイによる福音書 6章33節)と約束されています。本当に必要なものをご存知な神が、なくてはならぬものをお与え下さいます。すべてが神のものである、ということは唯一の慰めなのです。(『ハイデルベルグ信仰問答 1』)

主イエス・キリストは、私たちを主ご自身のものとするために、十字架に架かり、死んで葬られました。私たちの魂の奥底の汚れた思いさえ洗い清めて、神のものとするために、十字架の上で苦しみを担って下さいました。死人の中から引き上げられた主は、やがて終わりの日、再び来て、私たち絶大な報いをお与え下さいます。主イエスを信じる者は、主のもの、神のものとして神の国に受け入れられて、永遠の命を受けるのです。

神のものとしてされていることを感謝し、隠れたところまで一切をご存知の神が、神に愛されるのに到底ふさわしくない私たちを愛して下さい。あふれるばかりの報いを与えようと、終わりの日を準備して下さっていることを感謝して歩みましょう。

(記 岡村 恒)